

# 緑の地球 **GREEN EARTH**

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- 第3回会員総会開かれる ..... P 2
- 大同は豊作でした ..... P 5
- みんなでアイヌ語を覚えよう ..... P 7



長城の村、守口堡でマツを植樹。今年の夏村で植えたが活着しなかった南斜面に再挑戦だ(撮影:橋本紘二)

GENに参加するには

- ☆会員・会報購読者になる
- ☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ☆ワーキングツアーに参加する
- ☆ビデオ『黄土高原に緑を!』を見る
- ☆使用済みテレカを集めて送る
- ☆KDD グリーンアースダイヤルに登録する etc. あなたのご参加を待っています!

1996・12

52

## 第3回会員総会開かれる 着実な協力の継続を

緑の地球ネットワーク第3回会員総会が11月30日、エルおおさかにて開催されました。

総会にさきだって、元京都精華大学学長の柴谷篤弘さんに、『持続可能な発展とは』と題した記念講演をしていただきました。60名あまりが熱心に聞き入りました。大変熱のこもったお話で、総会前の講演のため質疑の時間がもてなかつたのが残念でした。内容については次号でご紹介します。

総会は会員50名の出席と21通の委

任状で成立、活動報告、会計報告、会則改訂提案、新役員の提案などがおこなわれ、承認されました。会則改正案のうち、総会の定足数は「会員の過半数」から「3分の1」に修正されました。また、基本的にはNPO法案の成立をまって、法人化をめざすことも拍手で確認されました。

総会終了後の懇親会にも31名が参加、歓談を楽しみました。会員が集まる機会ははじめて、という参加者も多く、それぞれに話がはずんだようです。



GENの発足以来5年がすぎようとしています。これから、今まで以上に困難なことも出てくると思われますが、みなさまのいっそうのお力添えをお願いします。

(東川)

### 新役員の紹介

活動報告、会計、会則に関する文書は会員の方にはすでに送りしましたので、ここでは新役員をご紹介します。

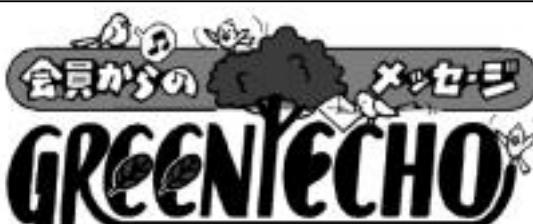
【顧問】石原 忠一／小川 房人／遠田 宏

【代表】立花 吉茂 【副代表】西山 五郎／有元 幹明

【事務局長】高見 邦雄 【会計】太田 房子

【世話人】竹中 隆／前川 宏／板坂 靖彦／武田繁典／川島 和義／巽 良生／上田 信／岡田光司／深尾 葉子／山永ユカリ／東川 貴子／嶋田光雄／長坂 健司／工藤 寛之

【会計監査】松橋 二郎／早草 晋（敬称略・順不同）



会員総会への委任状につけたメッセージ欄に、たくさんのメッセージをいただきました。ほんの一部ですが、ここにご紹介します。

●どんなことも開始することより、継続するための方がずっと大きいエネルギーを必要とします。まして、その事の内容が地味なほど大変なのです。その点で「緑の地球ネットワーク」の運動には本当に頭が下がります。それに関わって下さる方に感謝しています。会員でいるだけの協力しか出来ていないのにはがゆいのですが、せめて…と自分をなぐさめています。(M・O)

●来年こそワーキングツアーに参加したいと思っています。法人化が一日も早く実現しますように。(Y・K)

●佐野さんとの縁で入会しましたが、活動が着実に根づき発展していることに敬意を表します。このことは、今回の活動報告が最も充実しており、「世界」でもとりあげられていることに象徴されていると感じます。

先月末、河北省保定市を、技術者の

採用のため訪問した際、市の幹部や政協会議のメンバーといいくつかのテーマについて意見交換しましたが、政治、文化面では柔軟な発想も聞けたものの、環境に関する認識は非常に低く感じられました。中国の今後の歩みは、日本にも多大な影響を与えるので、今後訪問する時も、ある程度の摩擦が生じるでしょうが率直に意見を述べるつもりです。(M・T)

●なかなか活動に参加できなくてすみません。大阪でのイベントも行けなくてすごく残念です。でも会報は楽しく読ませていただいています。これから就職活動が始まるのでますます余裕がなくなるかもしれません、できる範囲で少しずつ協力したいと思っています。これからもよろしくお願ひいたします。(M・N)

●僕は6年生です。回りの自然がどん

どなくなっていますが、北海道の自然是、今まま、残してほしいと思っています。頑張って下さい。僕も大きくなったら協力します。今もできることは(リサイクルとか)しようと思っています。(E・N)

●今回は出席できませんが、GENの講習会や集まりなどに、また参加させていただきます。これまでの5年間のように、今後もどうぞ続けて下さい。人ととのつながりを大切にするGENの活動は、緑化を通じて私に希望を持たせてくれるものなのです。規模は大きくなても、基本的なやり方は今まで、GENの活動が続けられる事を願っています。(M・H)

●10月の中国黄土高原では大変お世話になりました。おかげで、物質文明ではかる日本の尺度でしか物を見ていないかった私の尺度に、もう一つ幅が出来たように思います。1か月程過ぎた今でも黄土高原の良さと、人の純真さがまぶたに浮かんで来ます。岩魚、山女を追い、キノコを取ってと、緑の恵みを十二分に受けてくらしている自分は何と良い環境に(次ページへつづく)



恵まれているのだろうとつくづく感じている今日この頃です。(K・H)

●NGO-NPOに対する社会的評価の高まりの中、政府に対して法人化の簡素化、税制面での優遇など、NGO活動を法的に活動しやすい体制作りの運動を始めたいものです。(T・M)

●活動報告をありがとうございます。会報を読ませていただいているだけの会員ですが、とにかく何かできることからと思い入会しました。会員であることだけでもひとつの意思表示かと。

わたしは趣味で山登りをしています。昔と比べれば破壊されつつあると言つても、自然から受ける恩恵は計りしきません。今月は食糧サミットが開催されるとか。自国の耕地を荒らして外国から食料をかき集めている日本。その国に属しているわたし。そんなんのはおかしいひとりでは声をあげられないから、こうしてまずは会員になってます。(E・Y)

●NPO法案はどうなるか。注目しています。GENの法人化、是非とも実現したいものです。(H・T)

●御無沙汰ばかりで申し訳ございません。仮設住宅のお年寄りのお話相手のボランティア&地域活動等で、日々が過ぎてゆく生活をしています。中国人のお友達も沢山出来ました。娘は小学校の養護学級で介助補助の仕事をし、夜間の最終学年にトライしていますが、卒業出来るか??? 皆々様の御活躍を

祈っております。(Y・N)

●私は少しは果樹栽培の経験もあり、大同には毎年でも参加する予定でしたが、最近軽度の身障となり中国にも5~6年は行っていません。若いボランティアの方達、私の分も元気で育つよう苗木をはげましてあげて下さい。時々はゴビの砂煙や青海の菜種畑の夢を見ます。(M・F)

●ご苦労様です。規約が規制にならないようにして下さい。(K・H)

●私の小さな力が、この地球を守るためにひとつぶの砂であろうとも、ひとつぶの砂の集まりが必ず次の生命につながると信じています。いつかお会いしましょう。(Y・O)

●絵はがき“黄土高原の四季”橋本さんの撮影はすばらしい。きびしい土沙漠、高原を想う時、あの地での子どもたちよ幸あれ…と。もう一度だけ訪れたい。黄土の地に緑よ広がれと願う。(F・S)

●活動推進役の皆さん、いろいろ大変でしょうが頑張って下さい。法人格が早く取れて、専任職員の方々の身分が安定するようになると良いですね。二風谷のワーキングツアーに一度参加できたら、と思っていますが、勤務の都合で実現できず、残念です。(N・Y)

●いつも会報楽しみに見させて頂いております。何一つ協力が出来ていないことに後ろめたさを感じたりもします。でもずっとこれからも前向きに環境の

こと、色々なこと、正面から向かい考える心だけは、忘れずいたいと思います。役員の皆様、本当にいつもありがとうございます。(N・Y)

●ご返事が遅れてしましました。私ももうすぐ20歳になります。そう思うと春のワーキングツアーは十代最後のbig eventだったなあ、と振り返っています。また機会があったら、是非、参加させて下さい。では、また。(J・T)

## GEN 講演会 『沙漠緑化と微生物』

黄土高原の緑化協力もソフト面の充実が課題になってきました。来年の新しいチャレンジは菌根菌（土中微生物）。

土中微生物ってなに？ 第一人者の小川真さんに講演していただきます。

### 『沙漠緑化と微生物』

●講師：小川真さん ((株) 関西総合環境センター生物環境研究所所長)

●日時：1997年2月4日（火）18時30分～20時30分

●場所：アピオおおさか（JR環状線・地下鉄中央線「森ノ宮」駅徒歩3分、TEL. 06-941-6332）

## 1997春の黄土高原ワーキングツアーへの誘い

季節の変わり目である春の黄土高原は毎年状況が違います。日中は20度をこえる暖かさがつづいて持参したカイロが無駄になった年もあれば、雪の降りしきるなかで植樹をしたことありました。でも、やっぱり春は植樹の最

適期ですし、黄土高原がもっとも黄土高原らしい季節もあります。そんな大同を訪ねてみませんか。

●日程：1997年3月27日（木）～4月6日（日）

●費用：一般 17万円、学生 16万円  
(国際航空運賃、中国国内での交通費／食費／宿泊費、ビザ取得手数料、GEN会費1年分ふくむ)。

※中国国際航空利用予定

※関西国際空港発着

※成田空港発着便利用ご希望の方、北京もしくは大同で合流ご希望の方、ご相談に応じます。



●定員：25名

●締め切り：2月28日（ただし、定員に達し次第締め切ります。）

●お問い合わせ・お申し込み：GEN事務所までお電話・FAX・E-MAILください。申込用紙をお送りします。



# 世界の森林と日本の森林（その6）

立花 吉茂（緑の地球ネットワーク代表）

## 森林の自然再生

原生林が何かのことで消失しても、日本のように暖かい時期に雨の多い場所では、いつしか草が生え、灌木がでてきて、やがて二次林となり、数百年後には元の植生にもどる。これを遷移と言っているが、最初に現れる樹木は、元の原生林の樹種と違って生長のはやい柔らかい種類の木が多い。先駆植物と呼ばれるこれらの樹種は、人工的に種子を蒔いてみると、発芽が極めて悪く、長年かかって少ししか生えてこない。これらの種子は発芽しなくても死んでいるわけではない。きわめて長生きで何十年も生きているのである。しかしわざかしか生えない。これは植物の巧妙な生き残り戦術であると考えられる。先駆植物だけでなく、畠の雑草も、野生の植物はほとんど大部分がこんな発芽のパターンを有している。水分、温度、空気、光が適当な時、全部発芽するのは栽培植物である。全部生えたとき、洪水や嵐などの災害が発生

したら、その場所の野生種が絶滅する。植物はそう簡単に滅びないようにできている。少しずつ発芽して、都合のよいものは大きく生長し、条件の悪いものは発芽せずに、時期がくるのを待っているのである。

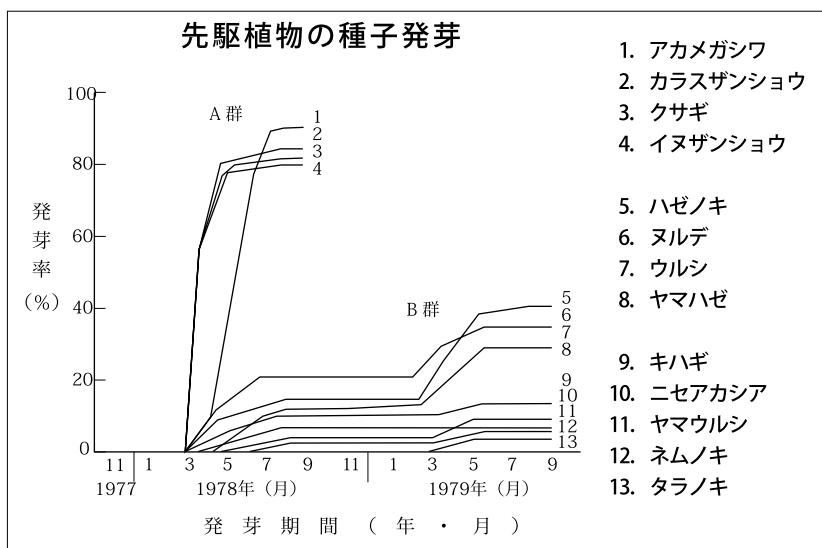
## 基本樹種の発芽

少しずつ、長年にわたって生えるのは一体どのような仕組みになっているのか調べてみた。しかし、原生林の基本樹種は先駆植物群とは違った発芽のパターンがある。ひとつのグループであるドングリの発芽については前号に記した。クスノキ科やモチノキ科などの基本樹種はまた異なった発芽のパターンを示す。前者は3か月ほど休

んで生えるものが多く、後者は2年がかりで生えてくる。そしてこのふたつのグループのように果肉のある奨果類は、果肉を除かないと発芽が遅れるし、乾燥すると死んでしまう。このように原生林の基本樹種は、いずれも乾燥すると短命である点が先駆植物とは異なる。基本樹種の種子の落下する場所は鬱蒼と茂った薄暗い湿った環境である。乾燥に弱いのはそんな条件下にあるからであろう。それに反して先駆植物の生える場所は、明るくて、乾燥する機会の多い場所で種子が発芽せねばならない。それは、種子発芽には良い環境ではない。そこで、ごく一部だけが生える作戦になるのであろう。

## 先駆植物の発芽

先駆植物の大部分は、種子が熟して落ちた翌年の春に10%程度発芽し、2年目の春にもまた少し生え、3年目にも、という具合に少しずつ徐々に生える。しかし、なかには90%もさっと生える種類もある（図）。



これらの種子の多くは水に浸しても吸水しない。解剖して調べてみると種子の発芽口が閉鎖しており、また種皮が硬化していたり、蠣状物を分泌していたりして吸水することを拒否してい

る。年数が経って、吸水できたものから順次生えてゆくのである。その証拠に、種子に穴を開けたり、硫酸で溶かしたりして無理やりに吸水させると90%以上もいっせいに発芽する。

昔、水田にレンゲソウの種子を蒔くとき、農家の人はその種子を砂といつしょにして白で擣いてから蒔いていた。レンゲソウは栽培植物ではなかったから、発芽がおそく、不揃いなので、種子に傷をつけて吸水を容易にしてやっていたのである。先人たちの観察眼の鋭さと生活の知恵には頭が下がる思いがする。

## 硬実種子と休眠種子

基本樹種の種子には短期間休眠するものがあり、これは冬を乗り切るひとつの作戦かもしれない。熱帯の野生樹にも、乾季のある地方では休眠種子が存在しているからである。乾季と寒季の期間中は休んでおく。なんと賢いやつらである。休眠を無理やりに覚ますには、冷蔵法とホルモン処理法がある。硬実種子は乾燥して貯蔵すれば、いつでも発芽させることができる。ウルシ科の植物は硬実種子だが、ヤマウルシだけは硬実と休眠とを合わせもつている特殊なものである。モチノキ科の多数の種類は発芽に2年間も必要だが、

これは一見成熟したように見える種子が実はまだ未熟で、親木から離れてからだいぶん経って成熟して発芽能力ができる。それで、こんな種子を後熟種子と呼んでいる。しかし、大阪で2年かかって発芽するクロガネモチが沖縄では翌年に発芽する。これは、大阪では開花から成熟まで

5か月で冬が来てしまうが、沖縄では12か月もあるから、親木で成熟することができるのだろう。



# 大同は豊作でした

高見 邦雄 (GEN事務局長)



小学校付属農園でトウモロコシのとりいれ

ちょっと遅くなりましたが、秋のうれしいお知らせをします。ことしの大同の農村は、どこも史上最高の豊作でした。春に訪れたとき、雪と雨があり、みなさんは雨までつれてきてくれたといつて喜ばれたのですが、その後も天候に恵まれ、夏に作物がよく育っていました。秋の天候も順調で、10月初めに大同に入ったときには、いちばん遅いトウモロコシの収穫がわずかに残っているだけで、1年に1度のタイミングを逃した写真家の橋本さんがくやしがりました。

昨年のおなじ時期は最悪でした。春は大旱魃、夏は水害、秋は早霜といつ

た災害に襲われ、土づくりの住居がつぶれ、収穫は平年の2~5割といった状態で、酷寒の冬を控えてみな呆然としていました。

自然災害は恐いことですが、もっと恐いのは、それがつづくことです。大災害の翌年が豊作だったことが、どんなにうれしいかわかつてもらえるでしょう。

大同でもっとも貧しい天鎮県でも、ことしは1人あたり食糧生産高が650kgにたっし、1人あたり年収が900元(1元=14円)を超えるかもしれない、といっていました。昨年は170kg、34万でしたから、かなりのものです。

春に植えた苗木の活着率もなかなかのものです。大同県のマツの植林は、枯れたものを探すのがたいへんくらいで、90%以上の活着率をかけ値なしに確保しています。

昨年から問題がでてきはじめた果樹園も、渾源県の照壁村のように新しいモデルもでてきました。94年春に植えたアンズが2m以上に育ち、まだ少量

ですが、ことしの夏には実をつけたそうです。ガンコそうな(?)お年寄りが管理してくれているところが、だいたいにうまくいくようです。「青年団との協力をやめて老人団とやっていくか」などと冗談をいいました。

大同事務所に待望の技術者がはいりました。従来から林業局の協力などをえていましたが、自前のスタッフをも

つとやはり変わってきます。  
候補地を  
選ぶ段階  
から、そ  
の意見が



エンバクの収穫

取り入れられることによって、確実性も高まります。来年からは土壤の改良、新品種の導入、土中微生物の活用などにとりくむことになっていますが、協力開始から5年がたって、だんだん体制が整ってきたことを感じます。

1994年はおもしろい年になりそうです。

## 緑の中国 <歴史篇> 10

上田 信 (立教大学助教授)

南に喬木あり  
休むべからず  
漢に游女あり  
求むべからず  
漢の広き  
泳ぐべからず  
江の永き  
方（いかだ）すべからず

この歌は中国古代の周の王室に伝えられていたもので、『詩経』国風に「漢廣」という表題で収められています。古来、中国ではこの「漢廣」を周の道徳を讃える詩だと解釈されてきました。つまり、周の文明が南方にも及んだので、南方の野蛮な青年たちは高い木の根本に日陰があつても、たむろ

して休んだりしなくなり、川で女の子たちが遊んでいても、ナンパなどしなくなったのだ、というわけです。なんとも堅苦しいかぎりです。

こうした道学者風の解釈のことを、「美刺」といいます。つまり、昔の政治や道徳の善し悪しを、美化したり風刺したりするために、孔子様が『詩経』を編集なさったと考えるのです。本当にそうなんでしょうか。中国でも都合主義的な解釈に疑問を持つ人もおり、たとえば朱子などは、『詩経』には淫らなものも含まれているんだ、と述べています。

しかし、本格的に新しい視点から解釈しようとしたのは、グラネというフ

ランス人の東洋学研究者でした。彼が生きていたのは、フランスがベトナムなどに植民地を持っていた時代で、インドシナ半島に住むさまざまな民族の風俗習慣に関する知見が、調査によって明らかになり始めたときでした。グラネはこうした報告書をヒントに、『詩経』の詩は、青年男女が掛け合っていた恋の歌、大地に根ざした祭礼で神々に捧げられた歌などから生まれたものだと考えたのです。

グラネの影響を受けて、白川静氏は日本の『万葉集』を手がかりにして、『詩経』を読もうとしました。そのため解釈が、どうしても日本的になります。「漢廣」も、「みんなみの神の高杉」のもとで繰り広げられる、川の女神の祭礼を歌ったものだということになるのです。

# アイヌ文化～刺繡と木彫り～にふれた半日

## 第19回チコロナイ学習会に参加して

清水 美帆 (岡山市)



勤労感謝の日の昼下がり。久びさに訪ねたりバティおおさか。参加者は12名。去年新築した建物の中に、アイヌ民族に関する展示室があるのが嬉しい。今回は、企画展「チカッپ美恵子アイヌ文様刺繡展『アパッポ・花』」を鑑賞し、チカッップさんとの交流会に参加するのが一つの目的であった。

作品は全部で75点。いずれも素晴らしい。文様そのものは、5種類の基本型とその組み合わせまたは応用であるが、色彩（配色）の絶妙さに思わず息をのんだ。作品名は、ワッカ・ウシ・カムイ（水の神）、アパッポ（花）、パイカル（春）、サスイシリ（永遠）、イソポ（うさぎ）など、神・自然・生物などがほとんどである。せめてこのぐらいはアイヌ語で覚えたいものである。

チカップさんとも実際の作品とも、初めての出会いであった。いままでは、カレンダーのなかでしか知らなかった。風邪をひいていらっしゃったにもかかわらず、明るい笑顔で、作品の解説を1時間ぐらいしてくださった。そのな

かで、「身近にある材料（布や糸）を使ってつくり、わざわざ高価なものを求めてはつくらない」とおっしゃったのが印象に残っている。まさに日常生活のなかから生まれたアイヌ文化なのである。母から娘への伝承に、心温まるを感じた。

その後、仲間たちは「アイヌ語講座」に出席したが、私は一足先にJR茨木駅へ向かった。今回のふたつめの目的、「自然とともにいきるアイヌ民具作品展」を鑑賞し、その作者高野繁廣・啓子夫妻と交歓するためである。二風谷に移り住んで20年あまり、すっかり土地の人になったお二人の作品を眺めながら、ここでもアイヌ文化の継承に目を見張った。木彫りと刺繡。ともに素敵な作品であった。

夜は、キムチ鍋を囲んでの楽しい語らい。目と舌の保養の有り難い半日であった。

## 第14回ナショナルトラスト全国大会から

松山 五郎 (寝屋川市)

1月22日、神奈川県立労働プラザホールでの開会式。主催者は環境庁と社団法人日本ナショナルトラスト協会、それに地元神奈川みどり財団です。新旧環境庁長官の挨拶・祝辞に、記念講演は音楽家としても有名な團伊久磨氏と豪華な顔ぶれでした。印象深かった言葉としては「自然是先祖からもらったものではない。子孫から借りたものである。だから利子を添えて返さねばならない」ということでした。参加規模は運動団体、行政、ボランティア等約300人でした。

シンポジウムには北海道キリタップ代表をはじめ埼玉、地元神奈川、企業からトヨタオート代表等がパネリストに招かれていました。

第2日、23日の午前中は団体交流会。A(運営) B(人材育成) C(広報) D(流域論)の4部会構成でおこなわれ、私はDグループに参加しました。ここでは、トラスト運動は必ず拠点(現場)をもっての活動でなければならないこ

と。ネットワークを広げるにあたっては行政区分の他に地形区分がある。そのなかには丘陵区分と流域区分がある。という理論が強調されました。私はGENの活動と『チコロナイ』の取り組みを紹介しましたが、特に異文化に学ぶ等のユニークさが高く評価されたようでした。展示場に写真パネルを展示でき、私たちの運動に確信を深めることができました。

午後はフィールドに出てのエクスカーション（小旅行）でした。私は三浦半島突端の小網代コースに行きました。この地域には広葉樹の森が小網代湾を抱くようにして、アカテガニに象徴される小規模ながらも豊かな生態系を形づくる自然があるはずです。しかし、そこに到着する前に目にしたもの、それは小網代湾に林立するヨットの帆柱でした。近くには油壺という良港もあり、多分ヨットハーバーになっているのでしょう。この三浦半島全体は首都圏に近い格好のリゾート地として、い

つ開発されるかわかりません。まわりの森はすべて大勢の地主の私有地なのです。このようななかにあって「小綱代の森を守る会」の運動は本当にきびしいものがあると実感しました。

全国から大小さまざまな団体、すでに20年も運動の歴史を有するもの、地主との関係や行政にはたらきかけたり、お金を得るための苦労話等先賢に学ぶところが多々ありましたし、私のような新参者も暖かく迎え入れていただき感激しました。どの団体もやはり「かね」に困っていました。たしかに財政は重い課題です。行政と携えての運動にまで高まってきたいま、官々接待やら汚職等々の世情賑々しい折りだけに、トラスト運動が本命とするところの、あくまで非政府(NGO)、非営利(NPO)に徹することの重要さを痛感したところです。一方、そろいの青色のユニフォームで黙々と会の進行を支えてくださった、地元ボランティアの若者たちの功績は特筆されねばならないと思いました。来年の会場は、三重県だそうです。

来年1月11日、15時25分から45分間NHK総合で放送予定の「約束の森（仮題）」でチコロナイの活動が紹介される予定です!!!

アオカオビッタ アイヌイタク アエラムオカロー！  
みんなでアイヌ語を覚えよう

チコロナイアイヌ語講座講師 平石 清隆

この11月、「チコロナイアイヌ語講座」も通算8回目を迎えることができました。今回は「私たちとアイヌ語」という内容で考えてみたいと思います。

私たちのまわりには、意外にアイヌ語起源のコトバがあるのです。北海道の地名、たとえば「札幌」「釧路」などはもちろん（ただ地名解に諸説あるので、ここでは説明を避けます）。たとえば「ラッコ *rakkō*」「シシャモ *susam*」「トナカイ *tunahkay*（これは樺太アイヌ語）」といった動物・魚類がそう。魚といえば、鮭が凍った「ルイベ *ruipe*」もアイヌ語だし、雑誌「ノンノ *nonno*」もアイヌ語の「花」という意味の語からとったものだそうです。また東北地方のマタギ（獵師）のコトバに「ワッカ（水） *wakka*」「サンベ（心臓） *sampe*」といった、どう見てもアイヌ語だという単語がはいりこんでいます。何より東北のかなり広い範囲にわたって、北海道同様アイヌ語起源の地名がたくさん分布しているのです。このように見れば、ひょっとしたらアイヌ語は中国語や英語に次いで身近なコトバといえるかもしれません。

ところが、アイヌ語地名を勉強してみたい、アイヌのユーカラをたのしたい、萱野茂氏のアイヌ語を理解できるようになりたい、といざ思っても、アイヌ語を学べる場や教材はおどろくほど少ないので。第一に試みに近所の、それもできるだけ大きな書店の「外国語」のコーナーでアイヌ語教材を探してみてください。まず見つからないですから（そもそも「アイヌ語は『外国語』なのか？」という素朴で重大な疑問がわきますが、ここではこれ以上ふれません）。第二にラジオやテレビでも「アイヌ語講座」的なものは北海道内をのぞけばありません。第三に大部分の学校一小中高、大学、専修学校、なんであれ一でアイヌ語は教えられていません。その一方で、アイヌ語を使いこなせるアイヌ古老は相次い、

で亡くなり、現在その数が「10名を大きく下回るのではないか？」とまで言われるほど衰亡してしまったのです。

アイヌ語がこれほど衰亡してしまったのも、アイヌ語を学ぶ場が整備されていないのも、アイヌに対して江戸時代以来つづく、和人の暴虐の結果であるのは明らかです。「10名を大きく下回るのでは」と言われるアイヌ語話者ですが、差別の的になるのを避けようと、アイヌ語をよく知っていても誰にも教えたがらない古老が実は何人もおられるようです。そして、そんな古老方は若い頃親たちから「アイヌ語を覚えるな」と言わしながら育った人が大部分なのです。それでも最近、多くの若いアイヌたちがアイヌ語を再獲得したいという気運が高まってきた現実には頭が下がる思いです。

個人的に言えれば、微力ながら一人でも多くの人にアイヌ語を伝えたいと私が願っているのは、それは先祖の罪を認めることであり、アイヌ民族の権利復権につながるのだと思うからです。また、お世話になっているアイヌの古老への何よりの恩返しだ、と思うからなのです。

## チコロナイ学習会 チコロナイアイヌ語講座の ご案内

毎月第4土曜日の午後におこなって  
いますが、12月はお休みにいたします。  
次回は1月25日（土）です。くわしく  
は次号でお知らせいたします。

なお、来年からこの『緑の地球』が  
奇数月のみの隔月刊になります。それ  
にともない、チコロナイ学習会・アイ  
ヌ語講座関係の案内などを、ご希望の  
方には『緑の地球』とは別に毎月お送  
りするようにします。お申し込みは、  
郵送料ともで1年間1,200円を80円切手  
15枚にして下記までお送りください。  
〒546 大阪市東住吉区今川6-2-6  
武田繁典 (TEL./FAX. 06-704-7720)

アイヌ語は英・独・仏語などより発音がなじみやすく、語順はほぼ日本語と同じで入門しやすいコトバです。何よりアイヌ的な「ものの見方=世界観」がわかることがたまらない魅力です。文化に、また純粹に言語に興味のある方、アイヌの権利回復に関心のある方、どなたでも大歓迎です！ 第1期の受講生のなかには「講演中の萱野氏のアイヌ語が少し聞き取れた」という嬉しい声もありました。みんなでやってみませんか？ お待ちしています！

【講師紹介】

**平石清隆** 大阪生まれ。大阪府立高校英語科教諭。大学在学中よりアイヌ語学習をはじめる。

1988年 貝澤正氏・萱野茂氏らと韓国を訪問。

1999年 中川裕氏・米田優子氏らのアイヌ語研究誌『ウエネウサラ』に参加。現在、田村すず子氏のアイヌ語テキスト改訂作業に協力中。またアイヌ古老人・上田トシ氏（沙流郡平取町）より聞かせていただいた昔話（ウエペケレ）の数字化・翻訳作業をすすめている。

# ナショナルトラスト・チコロナイに 寄付されたみなさまへ お知らせ

募金活動の案内のなかで、寄付された方に、以降3年間、1年に2回、経過報告やお知らせをお送りすると書いています。今まで、GENの会報『緑の地球』をお送りしてきました。前回は今年6月号でした。そして、この12月号がお手元に届くと思います。

『緑の地球』の7～11月の関連記事を別刷で同封しましたので、そちらもお読みください。なお、GENの会員、会報購読者には毎号が送られています。できましたら、そちらの方へのご協力もよろしくお願ひします。

## 榮永大治良さん 個展のお知らせ

95年の夏、黄土高原ワーキングツアーに参加された洋画家の榮永大治良さんの個展が開かれます。山西省の黄土高原を描いた作品も8点出展されるそうです。子どもたちに囲まれてスケッチなさっていた姿が思い出されます。

- 日程：1997年1月18日（土）～2月2日（日）
- 場所：セントラルギャラリー（地下鉄御堂筋線「心斎橋」駅下車、大丸百貨店南館向。TEL. 06-252-0956）

## 関東ランチから

★講座「緑の中国」第4回

「中国近代の森—『古井戸』から読みとれるもの」

◎映画上映があります。

- 日時：1月25日（土）14時～18時
- 映画上映「古井戸」
- 講師：上田信さん（立教大学助教授）
- 場所：立教大学7号館710教室
- 問合せ：上田信さん（TEL. 03-3838-1695、E-mail: GFA06526@niftyserve.or.jp）